

守邦親王伝承考

守邦親王の伝承と小川町の地域性

守邦親王とは、鎌倉幕府の九代目の将軍で、最後の将軍となった皇族の人物である。小川町には、守邦親王にまつわる伝承が色濃く残っている。これを史実として肯定する説もあるが、果たして信用に値するような内容を含んでいるのだろうか。また、守邦親王は、あまり知名度の高くない将軍なので、伝承が語られた背景には、何らかの地域的な特性が存在していたと考えられる。そこで、小川町の守邦親王伝承を紹介しながら、その歴史的な背景についても考察してみたい。

小川町における守邦親王伝承

大梅寺（小川町大塚）は、守邦親王伝承の本拠地ともいえる寺院である。永禄 10 年（1568）の勸進録によれば、大梅寺は、仁治 3 年（1242）、猿尾氏が霊山院（ときがわ町）の榮朝を招いて創建されたという。将軍の守邦親王は、幕府の滅亡によって当地に避難したが、やがて病死して大梅寺の円了長老によって供養が営まれたといわれている。また、大塚八幡神社（小川町大塚）にも、守邦親王伝承が残っている。寛延 2 年（1749）の略縁起によれば、大塚八幡神社は、守邦親王が鎌倉の鶴岡八幡宮を勧請して創建されたという。一説には、幕府の滅亡で慈光寺（ときがわ町）の付近に逃れた守邦親王が、猿尾氏に迎えられて、当地の梅香岡と呼ばれる居所に滞在したと伝えられている。大塚八幡神社の流鏝馬は、守邦親王の命日に奉納される神事で、生前に愛好していた故事に由来するという。さらに、栃本観音堂（小川町大塚）にも、守邦親王伝承が伴っている。正徳 2 年（1712）の栃本観世音縁起によれば、増尾兼信を始めとする地元の土豪が、所領や仏像などを寄進して、栃本観音堂を再興したという。当地に下向した守邦親王は、増尾氏から再挙を勧められたが、その計画を執行しないうちに、両者とも滅亡の途をたどったといわれている。これらの守邦親王伝承は、史料による内容の異同が著しく、相互に矛盾する部分も少なくない。しかしながら、守邦親王の関係者が、幕府の滅亡によって当地を訪れたという骨子は、基本的にすべての史料で合致しており、一連の共通する伝承群として把握することができるだろう。

守邦親王の経歴と伝承の評価

では、こうした守邦親王伝承が、歴史的な事実だった可能性はあるのだろうか。守邦親王は、正安 3 年（1301）、久明親王の息子として誕生して、延慶元年（1308）、幕府の九代目の将軍に任じられた。そして、元弘 3 年（1333）5 月、鎌倉の陥落によって出家して、同年 8 月に没したことが確かめられる。鎌倉後期の幕府は、北条氏が実権を握っており、将軍は傀儡的な存在だったので、守邦親王は処罰されずに済んだらしい。守邦親王の死因などは不明だが、その終焉の地は鎌倉が京都が有力視されている。したがって、一連の守邦親王伝承を史実として評価するのは難しいと思われる。これらの伝承は、あくまでも後世に創出された物語として捉えるべきだろう。

守邦親王伝承と鎌倉幕府勢力

守邦親王伝承は、中世に起源があったようだが、どのような経緯で小川町の地に定着していったのだろうか。まず、一連の守邦親王伝承が、幕府を思慕する勢力によって保持されたことは確実だろう。幕府の滅亡による政治的な混乱は、小川町の地にも影響を及ぼして、社会的な秩序が再編されたと考えられる。ただし、建武政権期に至っても、各地で北条氏の残党による蜂起が続発しており、幕府の再興を期待する勢力は、東国を中心にして根強く残っていた。このように、南北朝期に生き延びた武家の間でも、変転する状況に振り回されて、旧体制の復活を要望する声が高まっていたのである。こうした中世の政治情勢を踏まえると、守邦親王伝承を生み出した母胎としては、地域社会に温存されていた幕府の支持勢力を想定することができるだろう。

守邦親王伝承の歴史的背景

そこで、あらためて守邦親王伝承を見直すと、将軍を現地に迎えた存在として、猿尾氏と称する武士が登場するという共通点を指摘できる。小川町の地に根を張った猿尾氏は、幕府の潜在的な支持勢力として活動を続けていたのだろう。とすれば、猿尾氏の一族は、鎌倉期に先祖が幕府で活躍したことを強調して、最後の将軍に仕えたという伝承を地域社会に残したのではないだろうか。以上の仮説は、状況証拠に基づいた臆見かもしれないが、守邦親王伝承の背景を探ること

は、猿尾氏の実態を明らかにするという点でも、少なからぬ意義があると考えられるのである。